古典俳文学大系15

一茶集

丸山一彦
小林計一郎
校注

集英社

古典俳文学大系15

一茶集

昭和四十五年三月十日　初版発行
昭和五十一年一月三十日　三版発行

校注者　丸山一彦
　　小林計一郎

編集　株式会社創美社

発行者　陶山巌

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ッ橋二ノ五ノ一〇
電話　出版部(〇三)二三〇—六三六一
　　販売部(〇三)二三〇—六一七一

印刷　大日本印刷株式会社
　　大文堂印刷株式会社

定価　四九〇〇円

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。
著者との了解により検印を廃止いたします。

1392-120015-3041

©1970

目次

解説……三
凡例……一三
発句編……一七
寛政期……一九
享和期……三三
文化前期……四四
文化後期……七六
文政前期……一五〇
文政後期……一八七
年代未詳……三一
連句編……三七
紀行・日記編……四〇七
寛政三年紀行……四〇九
西国紀行……四三
父の終焉日記……四三

俳文編……四五
書簡編……五七
撰集編……五五
たびしうゐ……五七
さらば笠……六〇五
我春集……六一一
株番……六三三
志多良……六四六
三韓人……六六八
おらが春……六七七
索引……七〇五
発句索引……七〇七
連句索引……七三三
俳文索引……七三五
書簡索引……七三六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解説

今日でこそ一茶は、芭蕉や蕪村とともに近世の俳諧史を三分するほどの大きな存在として扱われるようになったが、もともとこの三者を歴史的に対置して論ずることは、不当の譏りを免れまい。なぜなら三者の俳諧史上に占める位置は、到底同一の比重をもっては論じられぬからである。芭蕉はいわゆる正風俳諧の始祖であり、その俳風は俳諧の本質を規定するものとして、元禄の俳壇のみならず、後世に至るまで甚深な影響を及ぼしている。蕪村もまた中興俳壇の第一人者として、俳諧の復興に、あるいは天明新風の樹立に、輝かしい足跡を残したのである。それに比して一茶は、俳諧の低落期といわれる化政期俳壇にあって、しかもその主流からはずれた特異な存在にしか過ぎなかった。もとより一茶とても、その周囲に理解者や同調者が皆無だったわけではない。彼のよき理解者・庇護者であった成美や、ともに風調を分かつに足る一瓢のごとき知友も存在した。また郷里帰住後は、彼を師として迎えた俳諧寺社中の数も少なくなかった。しかしながらその結社も、俳壇的にはほとんど影響力を持たぬ地方的存在に過ぎなかったのである。

一茶の活躍した文化・文政期は、松平定信の寛政改革のあとを受けて、将軍家斉治下の大御所時代と呼ばれる華美な時代であった。相次ぐ外国船の来航、幕府・諸藩の財政の窮迫等、内外の政情はいよいよ深刻の度を加えて、幕藩体制は内部的崩壊の危機を孕みながらも、定信の引締め政策に対する反動から綱紀は緩み、家斉の驕奢生活に倣い、浮華の風は上下に充満していた。そのような時代風潮の中で、当代の文芸界も安逸に流れ低俗に赴いた。ひとしく近世後期文芸と呼ばれるものの中でも、寛政改革を間に挟んだ安永・天明期と文化・文政期とでは、明らかに落差がある。秋成の初期読本、京伝の洒落本・黄表紙、蜀山人らの天明調狂歌、山の手連による初期川柳などの、高度の文人趣味に支えられた洗練の文芸と、その退潮後に現われた馬琴の読本、一九・三馬の滑稽本、真顔らの文政調狂歌、狂句化した川柳等を比べてみれば、その低俗化の現象は蔽いがたいものがある。俳諧もまたその例に漏れるものではなかった。安永・天明期の高雅な詩精神はもはや失われて、中興諸家が相次いで世を去った寛政以降は、俳諧は俄かに低俗の度を加え、やがて天保以降の月並調へと転落の途をたどりつつあったのである。

それはまた一面において、文芸の享受者層の拡大とその質的低下の現象とも対応する。享保以来の教育普及政策の現われとして、

寺小屋などの民間教育機関の急速な整備は、読書人口の飛躍的な増大をもたらした。そしてその大量の読者層が、やがて次の化政期の文芸の広汎な支持層を形作ってゆく。俳諧においても、その普及と大衆化は「昔は世を隙になす人、あるひは神主、または武士のもてあそびにしてありけるを、近き世上にはやりすぎ、人のめしつかひの小者・下女までいたさぬといふ事なし」（『見聞談叢』元文三年）という盛況であった。さらにくだれば『浮世風呂』（文化六～九年）に描かれているような、俳諧好きの御隠居、地口まがいの駄句をひねって喜ぶ小商人、銭がなくなると、仕方なしに俳諧と庭いぢりに退屈を紛らす道楽者などがそれである。それらの低級な作者たちの指導者として現われたのが、すなわち「今世は俳諧宗匠二三百人もこれ有るよし、皆風雅の道は露知らず、幇間にして口弁を以て渡世とすることなり」（『塵塚談』文化十一年）と非難された幇間的俳諧師たちであった。もはや風雅の精神などとは凡そ無縁の俳諧渡世者の群れである。このような宗匠たちの横行する俳壇が、俗化の一途をたどったのもあえて不思議ではない。

大原や月につんむく家一つ　道彦
門守りの婆々も野らこく牡丹哉　巣兆
後の月雨もなんぞの名残哉　士朗
蝸牛だまつて居ればうごきけり　完来
水鳥は鼻もひらずや鳰の海　卓池
何の苦もなく立つ鳴かあれがまあ　太笠

当時の俳壇の主流をなしていたのは、このような卑俗調であった。一茶の俳風の示す通俗性・大衆性も、やはりこのような時代の所産にほかならなかったのである。

一茶がその青年期に属していた葛飾派の俳風も、理念的には蕉風を標榜しながら、その実質は美濃派的な平談俗語を用いて、童蒙にも聞きわけ易い句風をねらいとしていた。「こそぐりて真実見たしねはん像　無的」「ざんぶりと浴せて晴る柳かな　不二研」「どか〳〵と月吹ちらす落葉哉　素孝」というような葛飾派の俗談調の洗礼を受けたことが、後年の一茶調形成の一素因となったことに注目したい。また当時の江戸俳壇で最も広く流行していたのは、浮世風と呼ばれるものであった。それは其角を祖とする活達・洒落な都会風の俳諧で、軽妙な人事句を中心とするものであった。『一茶留書』などの読書メモによると、其角関係や江戸座の俳書に親しんだ形跡が見られるから、一茶が其角の流風に学ぼうとしていたことは確かである。しかも、寛政から文化へかけて、この浮世風

には俗言・鄙語を用いた「田舎体」という新しい傾向が生まれてくる。それは都会風に飽いた人々が地方色に新味を求めてきた傾向を物語っているが、同時に『田舎芝居』（天明七年）に始まり『道中膝栗毛』（享和二～文政五年）に至る文壇の田舎物の流行とも揆を一にしている。一茶の特色とされている田園臭や人間臭も、このような時代の傾向に連なるものであったといってよい。

発句であれ連句であれ、一茶の作中には、川柳や雑俳と共通する語彙・素材が頻繁に現われてくる。ほかにも卑近な発想といい、季題の軽視といい、諷刺的な傾向といい、両者に共通する要素は思いの外に多いのである。

ねはん像銭見ておはす貞も有（文化12）
武士に蝿を追する御馬哉（同13）
づぶ濡の大名を見る巨燵哉（文政3）

のごとく、神仏や支配者をその権威の座からひきずり下ろし、その中に自分たちと同じような弱点を見つけて小気味よがっているさまは、明らかに川柳の手法に近い。一茶が柳書にどの程度親しんでいたかは、今のところ確証はないが、少なくともここに見られるような句は、川柳風の穿ちをねらったものといってよかろう。また、

艸の葉や燕来初てうつくしき（文化2）
陽炎や蚊のわく藪もうつくしき（同3）
ほととぎす夜は葎もうつくしき（同4）
うつくしや雲雀の鳴し迹の空（同9）
うつくしや障子の穴の天の川（同10）
うつくしや年暮きりし夜の空（文政8）

同じパターンの中で、素材の組合わせを変えさえすれば、いくらでも量産が可能となる。このような作句法は、前句付・冠付などの雑俳的手法に通ずるものといえよう。一茶調の形成には、なおそのほかに、西国行脚中に出会った大江丸の談林的な円転滑脱の句調や、江戸で交遊の深かった一瓢の「花ざかり神も仏もあちらむけ」「銭なくてたもとふたつも長閑なり」「とかくして芒かれけりうかりひよん」のごとき放胆洒脱な吟調との交流なども、無視することはできない。

このように見てくると、いわゆる一茶調と呼ばれるものも、それは決して時代から孤立した彼ひとりの独創によるものではなかっ

た。それはまた、この時代の一般的風潮と無縁のものではなかったのである。もしも一茶が、このような時代の流行から一歩も脱け出せなかったとするならば、いわゆる一茶調の独自性は、もう何処にも求められぬということになろう。しかし田舎体と呼ばれるものにしても、江戸俳人のそれは、あくまでも都市中心の優越感から、地方色を諧謔の対象としたのに過ぎない。ところが一茶の場合は、逆に都市生活に対する反撥がその基調となっていた。「椋鳥と人に呼るゝ寒哉」（文政2）の句が示すように、長い江戸生活の間にも、結局は柏原の農民の子である彼は、信濃者・椋鳥と蔑視される田舎者に過ぎなかった。無粋で粗野で、泥臭さの染みついた彼には、瀟洒で粋を誇る江戸の雰囲気になじめるはずはなかった。江戸生活に対する憤懣を吐き出した句は、あげればきりがないが、しかしそれよりも、

月をめで花にかなしむは、雲の上人の事にして

おらが世やそこらの草も餅になる　（文化12）

米国や夜もつゝ立雲の峰　（文政5）

信濃雪ふり

田の鴈や里の人数はけふもへる　（文化8）

鴨も菜もたんとな村のみじめさよ　（同　12）

などの句になると、挺子でも動かぬ一茶の面魂が覗いている。彼はやはり農民の子であり、土に培われた農民気質をあくまでも失っていない。遺産分配をめぐるあの執拗な抗争も、生活権の確保のためであったにせよ、その心の底には、やはり根強い土への郷愁があったことを思うべきである。見せかけの田舎趣味を弄んだ多くの俳人とは異なって、一茶の句に特に鮮烈な個性が生きていたのも、この土着の性根を失わなかったからであろう。

少年時代を貧しい農村に過ごし、江戸へ出てからも渡り奉公の辛酸を嘗めた一茶は、骨にしみて生活の痛苦を感じていた。俳諧師の群れに身を投じてからも、一向にうだつは上がらず、知友の情にすがって転々と寄食生活を続けた。そういう彼は、江戸の俳人たちとは異なり、都市生活の享楽的な面などはほとんど句に詠んでいない。彼の目を捉えたものは、華やかな世相の裏側に隠された人生の惨苦や矛盾であった。

世路山川より嶮し

木がらしや地びたに暮るゝ辻諷ひ　（文化1）

出代の市にさらすや五十顔　（文政2）

越後女、旅かけて商ひする哀さを

麦秋や子を負ひながら鰯売　（同2）

追分

霜がれや鍋の炭かく小傾城　（同4）

これらはいずれも桟敷席から見下した華やかな人生劇ではない。いわば幕尻から覗き見た舞台裏の暗さに似ている。そして、世路に苦しみつつ生きる弱者たちを描いたこれらの句には、彼の深い嘆きが刻まれている。また、

ゆで汁のけぶる垣根やみぞれふる　（享和3）

楢の葉の朝からちるや豆腐槽　（文化1）

蝶とぶや横明りなる流し元　（同13）

杉箸で火をはさみけり夷講　（同13）

鍋の尻ほし並べたる雪解哉　（文政2）

などは、庶民生活の片隅から拾い上げられた珠玉のような作品である。このような生活詩・人生詩は、一茶によって開拓された新分野の一つであったといってよい。

生活のきびしさを身をもって体験した一茶にとっては、腹の足しにもならぬ風流や花月趣味などは、無縁のものであった。「はつ雪やそれは世にある人の事」（文化7）、「我ら儀は只やかましい時鳥」（同9）、「有様は寒いばかりぞはつ時雨」（同9）なのである。そこには、伝統的風雅観へのふてぶてしい反撥が表明されている。花月を題材として採り上げても、花月そのものの美的情趣にひたろうとするような態度は、彼には見られない。

山畠やこやしの足しにちる桜　（文政2）

汁の実の足しに咲けり菊の花　（同4）

桜も菊の花も、美的対象としてそこに存在するのではない。それよりも人間生活への強い関心や、現実的な農民気質がむき出しに

現われているのである。これも一茶の特色の一つに数えることができる。

「高く心を悟りて俗に帰るべし」（赤冊子）という芭蕉の遺語の示すように、俳諧の本質は、現実から出発しながらそれをいったん突き放し、廻り道をしながら再び現実に帰ってくるところにある。少なくとも芭蕉の俳諧はそうであった。また「離俗」を説いた蕪村の場合は、現実との乖離の上に、現実にはどこにも存在しない高次の美の世界を創造し得たのである。一茶の場合は芭蕉に近いが、その廻り道のしかたが極めて短い。現実との遮断がほとんどないのである。そういうなまな、現実の突き放し方の不足、それは詩としての完璧さという点では、高く評価し得ないものかもしれぬ。しかし詩的昇華に乏しいにせよ、その粗野であくの強い人間臭い作品には、他の二者に見られない親しさと迫力とがあった。

ただ一茶においては、その特殊な環境や境遇が、彼の作品に特異な歪みを与えていることもまた否定し得ない。生い立ちの貧困と継子のひがみ、江戸へ出れば椋鳥と蔑まれ、郷里に引っこめば不生産的な農村インテリとして白眼視される。家庭を営んでからも、相次ぐ妻子の不幸が死に至るまで彼を苛み続けたのである。そのような不遇の境涯が、歪められた笑いとなって吐き出されたが、皮肉であれ、嘲笑であれ、愚痴であれ、どれ一つをとっても、彼の悲哀に根ざしたものであり、独特の人間臭を濃くまとっている。一茶はたゆみなく作った。彼の意識をよぎり、感覚にふれるあらゆるものを、手当たり次第に句にしていった。また旧作の焼直し、古人・今人の句の模倣、駄句であれ類作であれ、委細かまわず執拗にこね返し、言葉が擦りきれるまで詠み続けたのである。『七番日記』九年間の年間平均作句数を調べると、実に八百句を超えるが、この旺盛な句作力は、晩年に至ってもさして衰えを見せていない。こうして残された句は総計二万に近く、文字通り俳諧一筋に生き抜いた彼の生涯であったのだ。

芭蕉・蕪村亡き後、俳諧の無気力な停滞期に、たまたま流行の卑俗調に乗って、生活と現実に挑んだ一茶の荒々しいタッチは、衰弱しかかった風雅の伝統に逞しい野性の血を流しこんで、これに新たな生気を吹きこんだものということができる。彼の句に「筍（たけのこ）や憎まれ艸も伸び支度」（文化5）というのがあるが、俳諧史に狂い咲いたこの野生の変わり種は、いつのまにか図太く根を据え、枝葉を伸ばして、あたりを睨（ね）め廻しているような趣がある。芭蕉・蕪村と続く俳諧の本流からはみ出して、傍若無人に悪態俳句を吐き散らした六十五年の生涯であった。だがその強い鼻っ柱のすぐ裏側には、彼の涙が隠されていた。惺庵西馬が奇しくも指摘したように、「ざれ言に淋しみをふくみ、可笑（をかし）みにあはれを尽して」（『おらが春』跋）という独特の泣き笑いの中に、確かに人の世の深さに触れさせる何物かがある。一茶の泥臭さや人間臭の氾濫が、一部の人々を辟易させながらも、不思議に我々の胸にまつわりついて忘れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

られないのも、そのためなのであろう。

本集は、一茶の作品を六部門に分け、発句編、連句編、紀行・日記編、撰集編は丸山が、俳文編、書簡編は小林が担当し、全体の校閲および解説は丸山が行なった。

発句編

一茶は克明な筆録を好む性癖があり、有名な『七番日記』を始め、『寛政句帖』『享和句帖』『文化句帖』『八番日記』『文政句帖』等、大量の句日記を書き残した。それらを集大成した大橋裸木編『一茶俳句全集』（昭和四年刊）には、約一万八千句を集録してある。そのうちには類想・類似句を相当含んでいるが、芭蕉の約一千句、蕪村の約三千句に比べると、句量のおびただしさは驚くべきものがある。その後も『寛政三年紀行』『さらば笠』『文化六年句日記』『志多良』『まん六の春』等、新資料の発見が相次ぎ、総数ほぼ二万句に近い。本編では、その中から五千三百余句を選んで年代順に配列した。選抄に当たっては、一茶の代表作はいうまでもなく、各時期の特色・傾向を示すものは洩れなく採録し、これを通観することによって、いわゆる一茶調の成立過程やその特徴等を十分に窺い得るように留意した。

各句とも、原則として初出句形、初出出典名によって掲出したが、別案・改案・類案等、句形に異同のあるものは、これを左注に示した。また連句の立句に用いられたものは、その脇句を参考として注記した。

収録句は一茶の作として確実なものに限った。たとえば「花見の記」付録の七十五句、茶静編『美佐古』所収の十七句などは、これまで一茶の作として取り扱われてきたが、前者は先師竹阿の遺吟であり、後者は茶静の作を一茶が選句したものである。その他、句帖類にもまま他作の混入が見られるが、それらはすべて除いた。また、一茶の前身とおぼしき菊明の句についても、なお検討を要するので、収録を見合わせた。（丸山）

連句編

一茶の連句を集めたものとしては、勝峯晋風編「一茶連句集成」（日本俳書大系『一茶一代集』所収、昭和二年刊）があり、これに一茶の一座した連句百七十八巻を収めている。本編にはその後の新出資料を加えて、二百六巻を集録した。ただし紙幅の関係から、文政

期の作品の一部を割愛し、ほかに菊明の連句も、「発句編」と同様に収録を見合わせた。

一茶の連句作品は、一茶自身の撰集・遺稿類に記載されたもののほか、梅塵・文虎・春耕らの門人連の抄録したものによって、その大半を知り得る。原稿の作成に当たっては、それらの自撰本・抄録本に照合し、校訂の正確を期した。また、各作品の成立年代についても新たに考定し、旧説を訂した点も少なくない。

一茶の俳句や俳文はよく知られているが、連句については不当に閑却されてきた。しかし、俳諧師の表芸は当時もなお連句にあったのであり、一茶の俳人としての力量を占う上からも、その連句を無視することは許されない。本編に相当の紙数を割いたのも、そのためである。通覧すると、技倆の伯仲した親しい俳友、たとえば樗堂・成美・一瓢・鶴老らを相手とした巻々は、吟調に張りがあり、付合の呼吸も合って佳篇が多いが、晩年に郷里の門弟たちと試みた作品は、吟調の緩みや、一茶調の安易な繰り返しが多く、見るべきものに乏しいようである。（丸山）

紀行・日記編

本編には、断片的な紀行文やいわゆる句日記の類は除き、まとまったものとして『寛政三年紀行』（一名『寛政三年帰郷日記』同年三月～四月）、『西国紀行』（一名『寛政紀行』同七年一月～四月）、『父の終焉日記』（一名『みとり日記』享和元年四月～五月）の三部を収めた。原本は無題で、ここに掲げた書名は仮題である。いずれも一茶自筆の稿本で、処々に改削の跡を残している。校訂に当たっても、自筆本もしくは覆製本に拠り、改削・推敲の個所等も注記して、できるだけ原本の面影を伝えることに留意した。

これらは一茶の文章としては比較的初期のものに属し、『寛政三年紀行』は先人を模倣した生硬な文体であり、『父の終焉日記』は、その人間臭に一茶らしい特色が出ているが、多分に誇張や偏執に満ちた圭角の多い文章である。これを晩年の円熟期を示す『おらが春』（「撰集編」所収）などの文章と読み比べてみるとよい。（丸山）

俳文編

一茶の文集として最もよく整っているのは、伊藤正雄氏の『解註一茶文集』（昭和十八年刊）である。本編は、主としてこの『解註一茶文集』により、そのなかから本集所収の諸書に含まれている文を除き、その後発見された『まん六の春』等の新資料に含まれる

文を付け加えたものである。『解註一茶文集』所収の文でも、真蹟に当たれるものはできるだけ真蹟に拠り、写真のあるものは写真に拠った。

一茶の俳文は題のないものが大部分であるが、『解註一茶文集』にならって、仮に題をつけた。原文に題のある場合は（原題）と注記した。門人の名で発表した文でも、一茶の筆に成ることが確かなものは収めた。（小林）

書簡編

一茶の書簡を集めたおもな編著は、俳諧寺可秋『一茶一代全集』所収「尺牘篇」（明治四十一年刊）、勝峯晋風『新選一茶全集』所収「俳諧寺一茶翁文通」「一茶書翰補遺」（大正十年刊）、『日本俳書大系――一茶一代集』所収「一茶書翰抄」（昭和二年刊）等である。そのほか『一茶遺墨鑑』（大正二年刊）、『一茶真蹟集』（昭和五年刊）等にも書簡の写真が相当数含まれている。

それらのなかで、最も多くの書簡を集めているのは『俳書大系』であり、四十八通の書簡を収めている（ほとんど書簡としての内容を持たぬ三通を除く）。一茶の書簡はこの後発見されたものが多く、本編には大系に倍する百余通の書簡を収め得た。それらの多くは故栗生純夫の主宰された俳誌「科野」に掲載されたもの、丸山一彦・中村英雄諸氏の教示によるものである。また『大系』所収の書簡でも、新たに写真又は真蹟によって訂正し得たものが少なくない。

本編所収の書簡は、なるべく真蹟に照合するようにしたが、諸書に写真の掲載されているものは、その写真を典拠として、あえて現所蔵者を尋ねなかった。書簡の形式に書かれていても、単に発句または俳文を書き送っただけで、書簡としての内容の全然ないものは除いた。一茶宛の書簡は、参考として関係ある書簡の次に入れたが、近い年次に関係の深い書簡がない場合は、適宜その発信年次に近い書簡の次に入れた。その大部分は長野市吉田の神職原春苗氏の所蔵で、一茶の手許にまとめられていたものが、俳友峯村白斎を経て、同家に伝わったものらしい。

本編では「俳諧寺一茶翁文通」を「一茶翁文通」と、『日本俳書大系――一茶一代集』を『俳書大系』と略称した。（小林）

撰集編

本編には、一茶の手に成った撰集として、『たびしうゐ』（寛政七年刊）、『さらば笠』（寛政十年刊）、『我春集』（文化八年稿）、『株番』

（文化九～十一年稿）、『志多良』（文化十年稿）、『三韓人』（文化十一年刊）、『おらが春』（文政二年稿）の七部を収めた。このうち、一茶の生前に刊行されたものは、『たびしうゐ』『さらば笠』『三韓人』の三部に過ぎない。『おらが春』なども刊行の意図があったらしく、清記して挿絵なども用意したが、遂に果たさず、没後二十五年を経て、嘉永五年に門人の手でようやく出板されるという有様であった。したがってその多くは稿本のままで、世人の目に触れることもなく、一部の門弟の間に伝えられてきたのである。

本編では、それらの自筆本もしくは刊本に拠って、正確な本文の掲出に努めたが、『志多良』だけは原本の所在不明のため、荻原井泉水氏の校訂本（昭和十二年刊）に拠った。また『さらば笠』には戸谷本・柳原本の二種があるが、戸谷本を底本とし、柳原本と対校して異同を注した。『我春集』以下の稿本の場合は、欄外注記や拗点・丸点の類もそのままに記し、原本の面影を伝えるようにした。

ほかに、門人たちの名で出板された『堇艸』（春甫編、文化七年刊）、『木槿集』（魚淵編、文化十年刊）、『迹祭』（同人編、文化十三年刊）、『杖の竹』（松宇編、同年刊）、『たねおろし』（素鐘編、文政八年刊）なども、一茶の代撰もしくは後見によるものであるが、ここには収めなかった。（丸山）

凡例

一、本集は一茶の作品を発句編、連句編、紀行・日記編、俳文編、書簡編、撰集編の六編に分け、各編とも書目・作品を年代順に配列掲出した。

二、各編とも（発句編を除く）、書目・作品の冒頭に簡単な解題を付した。

三、連句編、俳文編、書簡編では、収録作品に通し番号を付した。

四、発句編、連句編、俳文編、書簡編については、巻末に索引を付し、検出の便をはかった。

五、各作品は、現存する最良の底本に拠り、その忠実な翻刻を旨としたが、校訂に当たっては、読解の便をはかり、次の方針に従った。

1 本文には、適宜段落を設け、句読点・濁点をつけ、会話・引用等には「　」、書名には『　』をつけた。ただし、底本に元からある濁点については、右傍に（濁ママ）とし、とくに二字続きの場合には（濁二ママ）と注して区別した。

2 読解を補うため、新たに読みがな・漢字ルビをつけた。ただし、底本に元からある読みがなは、＜　＞をつけて区別した。

3 底本に送りがなを欠く場合は、読みがなでこれを補った。

4 かなづかいは底本のままとしたが、歴史的かなづかいに合わぬものは、右傍に（　）に入れて訂正した。

5 底本の片かなはそのままとした。

6 底本の誤字・当字などは、右傍に（　）に入れて正字を示した。

7 底本の衍字は（　）に入れ、右傍に衍と注した。

8 底本の脱字は、本文に〔　〕をつけて補入した。

9 底本にある拗点〳〵丸点。などはそのままとし、欄外注記・枕書の類はその旨をことわった。

10 漢文には句読点・返り点をつけ、部分的に読み下しルビをつけた。底本に元からある返り点・送り仮名は、現行のものと相違

してもそのままとした。

11　使用漢字は原則として現行漢字に改めたが、必要と認めたものについては、原形のままに残し、原本の面影を伝えるようにした。たとえば次のごときものである。

篭(籠)・咘(唾)・哥(歌)・柿(柿)・冰(氷)・霍(鶴)・灵(霊)・厂-鴈(雁)・逃(逃)・耻(恥)・躰(体)・菴-葺(庵)・貞(貌)・帋(紙)・艸(草)・舩(船)・八(風)・霄(宵)・埜(野)・寐(寝)・雰(霧)・屐(履)・鼡(鼠)・嶋(島)・迹(跡)・皷(鼓)・罰(罰)・壳(殻)。

12　本文に異同のある場合は、校異を末尾にまとめて注記し、底本・校合本は解題に明記した。簡単な場合は、文中に傍記した。

13　注は、本文右肩に算用数字で番号をつけ、適宜作品の末尾にまとめて掲げたが、地名・人名・特殊語彙・引用等についての略注にとどめた。ただし、発句編は校異を主とし、語注は省略した。

14　底本の挿絵は縮写して収めた。

六、底本を提供し翻刻を許された天理図書館・一茶記念館・愛媛県立図書館、ならびに小坂善太郎・荻原井泉水・湯本五郎治・久保田ひろ志・村松秀男・戸谷半之助・柳原多美雄・原春苗・西原正吉の諸氏、その他各地の一茶資料襲蔵諸家に厚く感謝の意を表する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com